「教育臨床総合研究21　2022研究」

教員の授業力向上に向けた，より効果的で効率的な校内研修の在り方

～授業映像を活用した取組を通して～

More Effective and Efficient In-School Training to Improve Teaching Skills Through the Use of Class Videos

田　中　英　也*
Hideya　TANAKA

要　旨

本論文は，小・中学校現場における教員の全国的な採用・配置状況を踏まえ，近年増加傾向にある経験年数の浅い教員（特に20歳代の教員。以下，若手教員）の授業力向上に向けた，より効果的で効率的な校内研修の在り方を探る。研究仮説としては，授業映像等を活用した内容を取り入れることで，教員の授業力向上に対して効果的で効率的な校内研修につなげられると想定する。研究方法としては，本大学内において教員をめざす学生を対象として，学校現場での授業映像を活用した実践に取り組む。そして，本実践から成果や課題を考察し，主題に迫りたいと考える。

〔キーワード〕　若手教員の育成，授業力向上，授業映像，解説付き，校内研修

Ⅰ　はじめに

1．研究の背景

現在，日本の出生数は年々下がってきており，それに伴い日本の子どもの人数は減ってきている。現状のまま進めば，児童・生徒数の減少，統廃合による学校数の減少となり，必然的に小・中学校等の教育現場で必要とされる教員数は以前よりも少なくなっていくと予想される。しかしながら，近年，50歳代の教員の大量退職や特別支援学級在籍者数の増加に伴う特別支援学級数の増加が主要因となり，必要とされる教員数（採用者数）が平成20年代に入った頃から増加傾向にあることが窺える（図１参照）。そして，小学校現場では令和３年度から国の政策により，１年

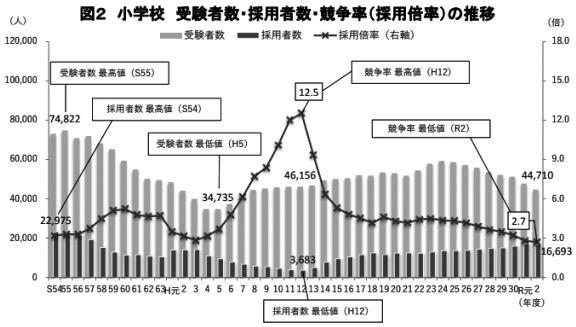

図１　小学校受験者数・採用者数・競争率（採用倍率）の推移（文部科学省2021）

*島根大学教育学部附属教育支援センター

生だけでなく２年生も35人学級となり，その後も段階的に上の学年（６年生まで）を35人学級にする計画となっている。このようなことが要因となり学級数が全国的に増加傾向であり，それに伴って教員数がさらに必要となってくると推察する。

また，大量退職に伴う教員の世代交代が進むことにより，現在の学校現場は既に若手教員の人数が増えてきている。さらに，新規採用者の中には以前よりも多く大学新卒者が含まれる状況（令和３年度，鳥取県は７割程度：鳥取県教育委員会人材開発課（2021）「鳥取県における教員の確保について」から）となっている。

２．研究動機

「小学校学習指導要領（平成29年告示）」改訂の経緯にあるように，近年，学校現場は全国的に教員の世代交代が進むと同時に，学校内における教師の世代間のバランスが変化し，教育に関わる様々な経験や知見をどのように継承していくかが課題となっている。「OJTによるとっとり人材育成の手引き（鳥取県教育委員会2021）」（以下，「手引き」）においても，「新規採用者が増加し，鳥取県における教員の年齢構成が大きな変化の時代を迎えており，若手教員の育成が重要な課題の一つとなっている」としている。実際に筆者が米子市教育委員会（平成29年度～令和元年度）在籍時には，年々，教員の定年退職者数や初任者数が増加していた。これに伴い，学校現場では豊富な経験のある先輩教員から若手教員へ教育技術やその他様々な実務のノウハウ等の継承が難しくなっていることや，実務経験が皆無，あるいは僅かな若手教員に対して即戦力として期待される資質能力の育成を訴える声が，学校現場から届いていた。

そして，若手教員育成の重要性については，筆者が小学校現場に在籍し15年前頃から，初任者や実務経験の浅い講師等の若手教員と学年団を組むようになり，その時の経験から痛感している。若手教員が抱える具体的な困り事・悩み事としては，授業を進める際の学習指導に関することや，よりよい集団づくり等の学級経営に関すること，児童間での問題が発生した際の生徒指導，特別な配慮を必要とする児童の対応に関することが主に挙げられる。このことは，鳥取県教育委員会（2021）が初任者の困り事・悩み事を把握するために行った「第１回初任者アンケート結果」からも同様な傾向が見られる。これらの困り事・悩み事の中で，特に学習指導に関することは実務の中で最も大きなウエイトを占め，この業務を適切に遂行することができなければ，児童生徒の学習意欲の低下や学習内容の理解度の低下，自己肯定感の低下，教師への不信感等に直結し，様々な問題が発生する可能性が高くなる。さらに，問題が発生すると，若手教員一人での対応が困難なため，学年団の教員や管理職がチームとなって対応することが多くなり，度重なると本人だけでなく学校全体としても疲弊することとなる。逆に，学習指導に関する業務を適切に遂行する力（図２内，学習指導（授業力）の観点で，特に経験年数の浅い教員期間である〈キャリアスタート期と育成期〉参照。以下，「授業力」）が身につけば，若手教員は困り事・悩み事が解消されるだけでなく，教材研究や児童生徒理解等を円滑に行うことができ，多忙解消や児童生徒とのよりよい人間関係構築，主体的・対話的で深い学びの実現につながることが想定される。また，若手教員が「授業力」を身につけることによって，先輩教員は若手教員に助けられながら学年経営やその他の校務分掌業務等を進めることができるようになり，よりよい学校運営につながっていくことも想定される。既述の若手教員育成につい

ては，近年の教員配置の傾向に鑑みると今後さらに重要性が増すこととなる。

また，教員の資質能力の育成については，「手引き」や筆者の経験から，教師の業務の多くが児童生徒や保護者，地域等の実態に応じて進める特性上，業務内容をマニュアル化しにくいため，経験を積めば自然と資質能力が身につくというものではないと考える。

以上，大きく 3 点から若手教員に効果的で効率的な方法を用いて教育技術やその他様々な実務のノウハウ等（特に「授業力」）を継承していくことは，学校現場において喫緊の課題の一つであると捉える。そして，現在鳥取県教育委員会との人事交流で島根大学教育学部附属教育支援センターの准教授として勤務する中，教職をめざす学生に同様に「授業力」を身につけることは，教員養成を担う本学部の重要課題として認識するところである。

そこで，学校現場でのこうした課題を効果的・効率的に解決するには，「手引き」にもあるように勤務場所である学校内で「授業力」向上に取り組むことが近道の一つになると考える。そして，業務の多忙が叫ばれる学校現場において新たな取組を行うことは非常に困難なことであるため，現在ほとんどの学校現場で行われている「授業力」向上に向けての取組である校内研修（特に授業観察を基にした授業研究）を工夫することで，業務改善を意識した上での効果的で効率的な若手教員の「授業力」向上が図れるものと想定する。

鳥取県公立学校の教員としての資質の向上に関する指標【教諭等】

平成31年4月1日　鳥取県教育委員会

職／ステージ／観点 指針の配慮項目番号 キーワード			教諭等・主幹教諭・教頭・副校長				
			キャリアスタート期（教員養成完成時・採用時）	育成期（第1ステージ）（1～5年目） 教員としての必要な基礎的素養・指導技術を広く習得し、実践的指導力を身に付けるとともに、学校組織の一員としての自覚を高める。	向上期（第2ステージ）（6～10年目） 第1ステージの経験をもとに、学習指導や学級経営の専門的知識・技能を習得するとともに、得意分野の開発と実践的指導力の向上及び視野の拡大を図る。	充実期（第3ステージ）（11年目以降） 第2ステージの経験をもとに、職務に関する専門性をよりいっそう高め、広い視点から学校運営に積極的に参画するとともに、指導的立場としての力量及び管理的立場としての力量(マネジメント能力)を高める。	
						充実期前期（11～15年目）	充実期後期（16年目以降）
素養	①教職を担うに当たり必要となる素養	理解力、教育的受情	児童生徒に対する深い理解と教育的受情を有している。				
		専門的知識・技能、指導力	教科等に関する専門的な知識・技能と実践的な指導力を有している。				
		創造力、対応能力	課題解決に向けた柔軟な発想と対応能力を有している。				
		自覚、協調性、倫理観	組織の構成員としての自覚と協調性を有するとともに、教育公務員としての倫理観、及び法令順守の精神を有している。				
		教養、人権意識	社会人としての豊かな教養、優れた人権意識を有している。				
学習指導（授業力）	②教育課程の編成、教育の方法及び技術	各学校の特色を生かしたカリキュラム・マネジメントの実施	・年間指導計画 ・単元構想 ・学習指導案	・教育課程の編成に関する基礎理論・知識を習得している。	・「学習指導要領」の趣旨・内容を理解し、担当教科・領域の年間指導計画を作成するとともに、児童生徒の実態を把握し、その実態に応じた単元構想や教材づくりに取り組んでいる。	・「学習指導要領」の趣旨・内容を理解し、学年や教科の系統性を踏まえた年間指導計画の工夫・改善を行うとともに、児童生徒の実態や学校、地域の特色を生かした単元構想や教材開発に取り組み、専門性の向上を図っている。	・「学習指導要領」の趣旨・内容を生かし、教科横断的な視点を持って校内の教育課程づくりに携わるとともに、現状分析をもとに学校や地域の特色を生かした単元構想や教材開発を行い、校内研究会等で改善案を提案している。	・校長の示す学校教育目標や学校として目指す方向性、及び教育活動の在り方を踏まえ、学校の特色化・魅力化づくりに積極的に関与している。
		主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善	・学習集団 ・指導評価 ・指導法工夫 ・授業改善 ・主体的、対話的で深い学び ・情報教育機器(ICT)の活用	・学習指導法に関する基礎理論・知識を習得している。 ・情報教育機器の活用に関する基礎理論・知識を習得している。	・課題の発見・解決に向けた主体的・対話的で深い学びを実現させるための授業を実践している。 ・情報機器等を積極的に活用した授業を実践している。	・課題の発見・解決に向けた主体的・対話的で深い学びを実現させるための授業を実践することで、これからの時代に求められる資質・能力の育成を図っている。 ・情報機器等を活用した教材を開発し、工夫ある授業を実践することで、児童生徒の学びの質の向上を図っている。	・課題の発見・解決に向けた主体的・対話的で深い学びを実現させるための授業を実践するとともに、教科横断的な視点を持って校内における授業改革の推進を行っている。 ・情報機器等を活用した教材を開発し、工夫ある授業を実践するとともに、他の教員に情報機器等の効果的な活用方法を助言している。	

図 2　鳥取県公立学校の教員としての資質の向上に関する指標【教諭等】（一部抜粋　鳥取県教育委員会2019）

Ⅱ　研究課題と仮説

1．研究課題

教員（特に若手教員）の「授業力」向上に向けた，より効果的で効率的な校内研修の在り方を探る。

2．仮説の前提と先行研究

筆者がこれまでに小学校教員，教育委員会での指導主事として関わった若手教員や，現職の大学教員として関わった教職をめざす学生からの声から，授業研究会に参加した際に次のような実態が挙げられる。

【公開授業参観の際の実態】

○授業の中のどこが，なぜ良かったのか（授業のポイント）が分からない。

○授業のポイントが分からないまま公開授業が進み，そのまま時間だけが過ぎていく。

○校内で開催される公開授業に度々参加することで，自分が担任する学級の業務や担当する授業を進められない。

○放課後にある研究協議で経験豊富な先輩教員から挙げられる授業の成果や課題を聞くことで，何とか，その授業のポイントが不明確であるが掴める。

○公開授業参観中に，一緒に参観していた先輩教員からその場でその時に伝えてもらうことで授業のポイントをはっきりと理解することができたことがある。

○授業のポイントをより多く掴めるようになり，研究協議で的を射た意見を出せるようになったのは30歳になる頃であった。

○せっかく授業のポイントを掴めるようになったが，公開授業中に若手教員や学生に，その場でその内容を伝えることができない（公開授業中に私語をすることは授業者の指導の妨げにつながる。授業参観をする際のマナーとして失礼になる。）。

以上のようなことから，現在多くの学校現場で行われている授業研究会（公開授業とその後の研究協議）の内容及び方法では，若手教員にとって「授業力」を向上させるために効果的・効率的ではないと窺える。

また，これらの問題を解決する一方策として，「高度な教職実践力をはぐくむデジタル基盤教材開発事業『匠のわざ』の伝承プロジェクト（福岡教育大学2015）」（資料１参照。以下，「伝承プロジェクト」）や「動画を活用した授業分析演習とその効果（青山他2020）」（以下，「青山他2020」）がある。これらの研究では，入門期にあたるストレートマスターが「生の授業」（映像を介さず，直接そのままに観察できる授業を「生の授業」と論じている。）を観察すると，授業を分析したり改善したりする際に困難が生じると指摘している。さらに，授業映像には「生の授業」から授業の事実を記録し，分析する際に生じる難しさを回避できる特性があると考察した上で，ストレートマスターを対象に録画済み授業映像（授業解説付き）を活用した「伝承プロジェクト」を実践し，次のような成果や課題をまとめている。

【成　果】（筆者要約）

○自らの分析視点を省察する構えと能力を形成することができた。

○授業を対話的な問題解決プロセスとして捉える構えと能力を形成することができた。

○抽出した学習者に焦点をあてて，学びのプロセスを捉えようとする構えと能力を形成することができた。

○授業実践において，学習者個々の学びを大切にしようとする構えを形成することができた。

これらの成果は，「伝承プロジェクト」の内容から，録画済みの授業映像を活用したことやリアルタイムの授業映像を活用したことに限らず，解説付きの授業動画を活用したことの効果であると捉える。

【課　題】（筆者要約）
「伝承プロジェクト」のような録画済み授業映像（授業解説付き）を活用することで，授業分析を行う難しさを回避することができるものの，リアルタイムの授業の最中に機能させることは容易ではない。

これは，録画済み授業映像では解説するタイミングや解説内容を事前に考えたり複数の教員で練ったりすることで解説を用意することができるが，「生の授業」やリアルタイムの授業映像では瞬時に解説を考えなくてはならないため容易ではない，とする結論に至ったと窺える。

しかしながら，学校現場では既述のような解説を，時間をかけて用意することは難しいため，本研究ではリアルタイムの授業に最大限対応することができる方法を考案したい。

以上のことから，本研究では解説付きの授業動画活用の効果を機能させつつ，リアルタイムの授業映像（「生の授業」では解説することができないため，リアルタイムの授業映像を活用する。）に対応した実践に取り組むこととする。

３．研究仮説と研究の前提

本研究では仮説として「リアルタイムの授業映像に授業解説を入れることで，リアルタイムの授業に対応しながら，『青山他（2020)』に基づく解説付きの授業動画活用の効果を得ることができる」と設定する。そのため，本研究では教職をめざす本学生を対象とした実践を行い，そこで「青山他（2020)」に基づく解説付きの授業動画活用の効果を得られることと想定する。さらに，本研究の成果は，学校現場で若手教員の授業力向上に向けた，より効果的で効率的な校内研修の在り方に活かせると考える。

本研究の前提として，この実践研究は鳥取県教育委員会との連携事業のもと行われていることを付記しておく。本実践は，鳥取県教育委員会と連携した「ICTを活用した連携事業（資料２参照)」の一つとして，「1000時間体験学修**『オンライン鳥取県エキスパート教員公開授業から学ぼう』」と題した取組（以下，「オンラインエキスパ」）である。

鳥取県エキスパート教員については，「鳥取県公立学校エキスパート教員認定制度に関する実施要綱（一部抜粋)」の中で以下のように定義している（下線部参照)。

【認定制度の目的】
認定制度は，高い専門性と指導力を有し，優れた教育実践を行っている教員をエキスパート教員に認定し，その教育指導技術等を広く普及することで全体の教育指導の改善を図り，もって鳥取県教育の充実を図ることを目的とする。

**本学部は学生に教育実践力を身につけることをねらい，外部機関と連携して1000時間の「体験学修プログラム」（以下，「1000時間体験学修」）を必修化している。

また，学生へのエキスパート教員公開授業の提供については，鳥取県教育委員会（2021）令和３年度島根大学教育学部と鳥取県教育委員会との連携協力推進協議会資料「エキスパート教員公開授業について（一部抜粋）」の中で以下のように示している。

【大学生のエキスパート教員の公開授業活用について】
本県におけるエキスパート教員の役割の１つとして，授業の公開がある。教員をめざしている学生がエキスパート教員の授業を参観することは，学生にとって大きな学びとなる。また，鳥取県の教師像が明らかになることで，鳥取県の教員をめざす学生が増えることが予想され，鳥取県の教員の確保につながることが期待される。

本実践で活用するリアルタイムの授業映像は，鳥取県内の学校現場からエキスパート教員の授業を，本学部に提供されたものである。そして，この「オンラインエキスパ」を活用し，次のとおり筆者がそれぞれの授業の解説者となり本活動に参加した学生を対象に実践した。

Ⅲ　研究の方法と実践

１．研究の方法

本研究は，まず教職をめざす学生を対象として，鳥取県内の学校現場から鳥取県教育委会の協力の下，本学部内に配信されるエキスパート教員によるリアルタイムの授業映像を活用し，筆者が適宜解説を行うという実践に取り組む。次に，その実践から効果を考察する。考察する材料としては，参加学生が記入した自由記述（振り返り）を用いる。最後に，考察内容を踏まえて学校現場における，より効果的で効率的な校内研修の在り方についてまとめる。

２．実践

授業映像はビデオカメラ２台から送られてくる２種類の映像を活用した。１台からは授業内容が把握できるように板書がはっきりと見える映像，もう１台からは授業中の教室内の様子が把握できるように教室全体を教室後ろから映した映像である。また，指導者や児童生徒の声等の音声が明確に届くように集音マイクを使用している。なお，授業映像の受け手である本学部では，２台のPCをそれぞれ２台のプロジェクター（大型テレビの場合もある）に接続し，板書と教室内の様子を視聴した。さらに，音声は本学部教室内に設置してある高出力スピーカー２台を使用した。

参観した期日や内容等は次のとおりである。

（１）「オンラインエキスパ（小学校算数）」から学ぼう

○期　　日　令和３年２月１日（写真１参照）
○場　　所　本学部棟内
○内　　容　公開授業「小学校３年生算数：□を使った式」
○参加学生　16名（１～４年生）

写真１：公開授業参観の様子（令和３年２月１日）

（2）「オンラインエキスパ（小学校国語）」から学ぼう

○期　　日　令和３年10月６日（写真２参照）
○場　　所　本学部棟内
○内　　容　公開授業参観「小学校５年生国語：物語の全体像を捉え，考えたことを伝え合おう『たずねびと』」
○参加学生　11名（１～４年生）

写真２：公開授業参観の様子（令和３年10月６日）

（3）「オンラインエキスパ（中学校道徳）」から学ぼう

○期　　日　令和３年10月29日（写真３参照）
○場　　所　本学部棟内
○内　　容　公開授業参観「中学校１年生道徳：安全で健康な生活『古びた目覚まし時計（東京書籍）』」
○参加学生　18名（１～４年生）

写真３：公開授業参観の様子（令和３年10月29日）

３．授業解説の内容

授業解説は「とっとり授業改革【10の視点】」（資料３参照。以下，【10の視点】）を基に，授業内容に合わせたものにアレンジして，筆者が解説を行った。

とっとりの授業改革【10の視点】

①　魅力的な課題・教材の提示	②　体験的な学習の充実
③　資料の活用	④　思考の整理
⑤　説明・発表の機会の充実	⑥　学び合う活動の充実
⑦　学習評価の推進	⑧　学習を振り返る活動の設定
⑨　家庭学習と連動した学びの定義	⑩　落ち着いてのびのびと学べる環境づくり

また，【10の視点】の10項目は，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につながるものとして以下のように考えられていることから，筆者の解説を項目内容に従って満遍なく行うことで，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けてより効果的で効率的な研修につながると想定する。そして，これにより解説者は解説する際の視点が明確化されることで適宜解説しやすくなるため，リアルタイムの授業映像にも対応することができる。

※　○内番号と項目名は，【10の視点】のものと一致する。

【10の視点】の中で「主体的・対話的で深い学び」に関係の深い視点

〈主体的な学び〉①　②　③　④　⑦　⑧　⑨　⑩
〈対話的な学び〉③　⑤　⑥　⑩
〈　深い学び　〉①　②　③　④　⑤　⑥　⑧　⑨　⑩

実際に行った解説内容を【10の視点】項目に従ってまとめた。以下に例示する。

〈【10の視点】に従ってまとめた筆者の授業解説の内容（例）〉

① 魅力的な課題・教材の提示

・いきなり課題を提示するのではなく，このように提示した資料から分かることや疑問に思うことを子どもたちに問い，答えさせることで，子どもたちに課題意識を持たせていますね。そして，子どもたちの言葉を使ってめあてを立てる。こういった取組が子どもたちの主体的な学びにつながるのです。

・このような「めあて・自分で考える・みんなと話し合う・まとめる・適用題・振り返る」といった授業の流れの提示は，子どもたちが見通しをもって学習に取り組むことにつながります。これによって子どもたちは授業のゴールイメージをもつことができますね。先生自身の確認にもなります。

② 体験的な学習の充実

・この問題（算数）を解く前に，これまでに学習したことで使えそうなことをいくつか想起させましたね。それと，答えの予想も問いかけていましたね。これは，子どもたちを自力での解決に導きたい先生のねらいがあると思います。

・イチローさんの生活の中での具体的なルーティーンをいくつか紹介すること（道徳）によって，子どもたちが日常生活とつなげて考えやすくするねらいが先生にあると思います。これによって子どもたちは自らの生活を振り返ることにつながりますね。

③ 資料の活用

・黒板に提示された資料の字が子どもたちに見えづらいことがよくありますから，教室内で一番後ろにいる子どものところに行って実際に確認すると良いです。板書や資料が見えないというのは学習内容が理解できないということにつながってしまいますからね。特に文字は大事です。資料の文字は手書きをおすすめします。

・子どもたちに活用させたい資料は，黒板に貼って提示するのが良いか，大型テレビに映し出すのが良いか，配布物にして渡すのが良いか，または複数手段か等，より効果的な方法を選ぶと良いです。自分が子どもなら，今回は先生にどうしてもらえると学習しやすいでしょうか。

・子どもたちに理解させるためには，提供する情報を精査しなければなりません。あれもこれも前に貼っておくと，子どもたちはどれが必要か分からなくなりますから。

④ 思考の整理

・小学生の場合は特にノートづくりとつながるように板書をしていくと，子どもたちは助かります。このようにノートづくりとリンクした板書を行うことは，子どもたちの思考の整理を支援することになります。

・自分の考えや理由等をすぐに書き始めることが困難な子どもたちも想定されるので，そ

の支援として，このように「なぜなら」や「理由は」などを書き出し文として設定してあげると良いです。

⑤　説明・発表の機会の充実

・全体で話し合う前に，このように２人組で発表し合う場を設定しておくと，子どもたちが自信を持って発表することにつながります。それに，この活動によって，ひとまず全員に発言する場を確保してあげることになります。
・このように小グループで話し合わせるときは，私の経験から３，４人がちょうど良いと感じています。２人だと考えが偏ることが多いです。５人以上だと１人の発言時間が少なくなります。従って，多くても５人です。
・このように小グループで話し合わせるときは，たまに全く関係のない話をしているときもありますから，机間指導は大事です。また，机間指導するときには廻りながら，この後にある全体での発表の際にぜひ発表してほしい子を決めておくと良いです。さらに発表させる順番も考えておくと，先生は見通しをもって授業を展開することができます。

⑥　学び合う活動の充実

・授業の中で活動の時間を確保することは体験的な学びや子ども同士での学び合いにつながるので大事ですが，この先生のようにタイムマネジメントをよく考えながら進めなくてはなりません。たまに導入でかなり時間を使ってしまったり，この学び合う活動で時間をかけすぎてしまったりします。特に算数では，この後にある適用題を解かせる時間の確保は学習内容定着のために重要です。
・全体での話し合いの際には，先生と子どもが一問一答の関係にならないように気をつけると良いです。今のように子ども同士の考えをつなげる声かけをすると良いですね。「〇〇さんの考えを聞いてどうですか。」とか「同じように考えた人はいませんか。」とか，その時々のねらいに応じた声かけをすると効果的です。
・先程のように，全体の場で出てきた考えを確認する声かけは大事です。子どもたちに発言させっぱなしでそのまま進めていると，話し合いに参加できないどころか内容が理解できない子が出てきます。「〇〇さんの考えをもう一度発表してくれる人いませんか。」などと言って，子どもたち同士での確認ができると，これもまた学び合いになるので良いですね。

⑦　学習評価の推進

・自力解決（算数）に取り組み始めたところで，子どもたちをほったらかしにせず，このようにすぐに机間指導を行って，子どもたちの学習状況を把握するようにしましょう。これによって，つまずいている子に支援を行えたり，この後の授業展開をその状況に合わせた展開に変えたりすることができます。
・机間指導する際ですが，今のように教室全体に聞こえるくらいの大きさの声でヒントを伝える等の個別の支援を行えば，同時に子どもたち全員に対して支援を行うことができます。

⑧　学習を振り返る活動の設定

・感想は書かせっぱなしではなく，子どもたちが書いている内容を見て廻り，全体に広げたいことを把握しておき，先程のように先生が紹介したり指名して子どもに発表させたりすると学びが深まります。

・全体に広げたい内容としては，本時の学習内容を分かりやすく端的にまとめたものや次の学習内容に関係するもの，実生活とつなげて考えているもの等を私はよく取り上げます。また，友だちの頑張りに関わる内容も取り上げるとよりよい仲間づくりにつながります。

⑨　家庭学習と連動した学びの定着

・今回の道徳の教材文は，授業前に，既に家庭学習で読んできているようです。こうしたやり方もあります。この手法によって内容を読み取る時間は短縮できます。ただし，読んで来ないという実態もあり得るので，実態に合わせて手法を選ばなくてはなりませんね。

⑩　落ち着いてのびのびと学べる環境づくり

・先程，先生が子どもの発言に同感された後，続けて「私も実はね。」と失敗談をされました。これによって，教室内は素直な考えをさらに出しやすい雰囲気になりますね。

・子どもの意見は何でも，まずは受け止めるという，先生のこのような姿勢がのびのびと学べることにつながります。

・先生の表情，声のトーン，身振り手振り等は巧みに指導するための大事な道具です。そして，子どもたちが安心して学んだり集中して取り組んだりすることにもつながります。また，子どもたちは先生の言動を真似しますから，子どもたちのよりよい人間関係づくりにもつながりますね。

Ⅳ　実践の考察

リアルタイムの授業映像に解説を付けたことによる学生への学修効果を考察する。そのために，参加学生の自由記述（振り返り）の中から，解説内容に関係のある記述（下線部）を捉え，次のように【10の視点】の内容と照らし合わせて，その項目番号を振った。以下の記述はその中で代表的なものである。

そして，参加学生の記述の中に見られる，それぞれの項目の割合を図３にまとめた。

※○内番号は，【10の視点】のものと一致している。㊙には複数の項目内容が含まれるため，複合として取り扱う。

・授業の初めに問題を提起して，そこから子どもたちとめあてを立てておられ，①めあてを子どもたちと考える方法にこのような方法もあるということが分かり，勉強になった。

・④チョークの使用についてや③デジタル教材のデメリットなども学べたので，とても有意義であった。

・今日の活動を通して，最も大きな学びとなった部分は道徳の授業で大切なのは子ども自身が課題意識をもち，①授業の主題を自分のこととして捉え，向き合えるような展開構成及び発問が大切であるということだ。他にも④板書や教具の工夫，⑨授業前後の宿題などについても勉強になるところがたくさんあった。
・④箇条書きにしたり，四角で囲んだりするのは美しい板書のためだと思っていたけれど，児童がノートをまとめやすくしたり理論的に考えるために大切だと感じた。
・⑤グループ学習を行う上で，何の意図があるかなど当たり前のように設けられていることの意図や考えを理解することができ，今後活用できると良いなと感じた。
・教科が道徳なので話し合いが中心と言われるとそうだが，⑥いかに生徒が考え発言し，話し合えるかが授業をする上で大切だと改めて思った。
・⑩一人一人の言葉や表現を大切にされていて，児童にとって話をしっかり聞いてくれる先生という存在になっているのだと感じた。
・㊙教員が意図をもって，時と場面を見極め，どのような手法を用いるべきかを自分のものにしておくことが大切だと感じた。
・㊙固定概念を取り除いて様々な観点から授業展開をするためには，幅広い知識や物の見方を有していくことが必要であると感じた。

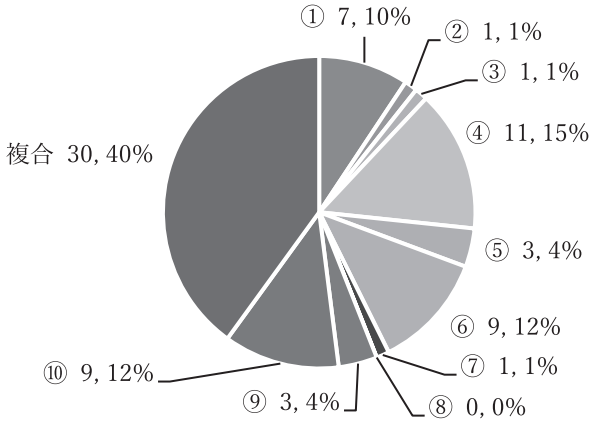

図３　学生の記述内容【10の視点】項目別グラフ

参加学生45名の自由記述の中で，合計75カ所に解説内容と関係のある記述を確認することができた。割合が比較的多かった項目は④の「思考の整理」であった。記述内容から主に板書に係る指導技術を学べたことが見て取れた。大学の講義では板書の技術を学修・修得する機会が少ない。実際の授業映像と解説から具体的に学べる板書の技術に，学生たちは興味をもったことと推察する。次に多かった項目は，⑥「学び合う活動の充実」と⑩「落ち着いてのびのびと学べる環境づくり」であった。⑥については，話し合う時間の確保や子どもたちが話し合いやすくなるような教師の工夫に触れるものが主であった。⑩については，子どもたちが安心したり集中できたりする学級の環境づくりに触れるものが主であった。現在求められている主体的・対話的で深い学びの学習活動をどのようにプロデュースするのかについて大学での理論学修は

できているが，それを実際に授業場面でどのように具体化するか分からないといった不安をもっていることが割合の多さにつながっていると推察する。逆に，②「体験的な学習の充実」や③「資料の活用」，⑦「学習評価の推進」は少なく，⑧「学習を振り返る活動の設定」については確認することができなかった。今後は，こうした項目を意識して満遍なく学べるよう解説を入れていく必要があると考える。
そして，次のように授業映像に解説を付けたことに係る記述を確認することができた。

・実際の授業を田中先生の解説と一緒に見ることができたので，どの部分がどのような目的や効果があるのかということや，注目していなかった場面も「ああ，そこのことか。」と分かったので良かった。
・田中先生の授業内での解説があり，その都度立ち止まって考えながら視聴することができた。
・授業内の田中先生の解説によって授業の見方やポイントの押さえ方をよく理解することができた。

このような学生の反応から，本方法はリアルタイムで解説することができる点で「生の授業」参観よりも効果的であり，「授業のポイントが分からないまま公開授業が進み，そのまま時間だけが過ぎていく。」等と言った課題が解消されると考える。

また，本方法はもう一つの課題であった，解説者のリアルタイムの授業映像への対応については，【10の視点】を意識することで解説しやすくなり一応対応することができるが，やはり解説者が初めて視聴する授業の内容や状況等を瞬時に把握し，同時に適宜解説するということは解説者にとって難易度が非常に高いと推察する。さらに，どれだけ指導助言に長けた解説者であっても，解説するタイミングや解説内容を，時間をかけて考えたり複数の教員で練ったりすることができないため，リアルタイムの解説には高いスキルが求められる。

Ⅴ　まとめ

仮説として設定した「リアルタイムの授業映像に授業解説を入れることで，リアルタイムの授業に対応しながら，『青山他（2020）』に基づく解説付きの授業動画活用の効果を得ることができる」については，今回はオンラインでの視聴ということもあり，【10の視点】を活用することでリアルタイムの授業映像にある程度対応することができ，参加学生は理解度に差があるものの，ほとんどの学生が解説を通して授業のポイントを掴むことができた。これにより，解説を聞きながら参観するという本方法は解説に課題はあるものの，解説のない「生の授業」参観よりも確実に授業力が向上することに見通しがもてた。

また，この授業映像が録画済みのものであれば，次の４つの利点があると考える。

①「青山他（2020）」でも述べられているように必要に応じて繰り返し視聴したり，立ち止まって分析したりすることができるため，授業のポイントをさらに捉えやすくなる。
②その時その場に行かなくとも公開授業を視聴することができるため，都合に合わせた時間や場所で学ぶことができる。これにより，授業参観のため自習等の対応をとる必要はなくなり業務改善につながる。

③解説者にとって事前にその授業を見ることができるため，その場で考えた（いわゆる即興の）解説ではなく，多少時間をかけて練ることや複数の教員（解説者）で練ることでより適切な解説を行うことができる。これにより，課題のあった解説の改善につながる。
④解説するとなると「なぜその部分が良かったのか。」や「その指導・支援がどういった良いことにつながるのか。」等と言った授業で見られる手立ての良さ（理由）を明確な内容で言語表現する必要があるため，解説者の学びにもつながる。従って，録画済み授業映像の活用は，参観者だけでなく解説者等となる教員にとってもより効果的な方法である。

しかしながら，録画済み授業映像には既述の利点があるものの，オンラインでのリアルタイムの授業映像にも次の 4 つの利点があると考える。

①リアルタイムの授業映像には臨場感があり，各場面を見逃すことがないよう，解説者を含め参観者にはより集中して参観することが求められるため，瞬発力の要る授業実践に役立つ研修につながると推測する。
②オンラインには本実践のような遠隔地であってもリアルタイムで授業を参観することができるため，その直後に開催される授業協議に参加することができること等の良さがある。
③既述したように公開授業中の私語厳禁というマナーにおいても，別室だからこそ授業の妨げにならずに質問でき，また解説できるという利点がある。
④学校現場は多忙なため，録画しておいて解説内容について時間をかけて考えると言った取組は実態にそぐわない。従って，リアルタイムの授業映像の活用は，より適切な解説につなげにくくとも，その場で解説内容を考えて行うことで「生の授業」よりも成果を得られることから，効率的な方法であると認識する。

こうしたそれぞれの利点から，本研究のまとめとして校内授業研究にリアルタイムの授業映像や録画済み授業映像を必要に応じて活用することで，より効果的で効率的に教員（特に若手教員）の授業力向上を図ることができると考える。

謝辞

本論文の作成にあたり終始適切な助言を賜りました本学部の川路澄人教授，仕上げにあたり助言を賜りました上代裕一特任教授に感謝申し上げます。

本実践を進めるにあたり，鳥取県教育委員会小中学校課の岸田靖弘課長補佐様と本学部の橋津健一准教授には多くの協力をいただきました。大変お世話になりました。

そして，授業を提供していただきました鳥取県エキスパート教員の方々，鳥取県教育委員会ご関係者の皆様に心から感謝します。有難うございました。

引用・参考文献

１）厚生労働省（2020）「令和 2 年版厚生労働白書-令和時代の社会保障と働き方を考える-」

2）中央教育審議会初等中等教育分科会（2020）「新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会（第６回）」会議資料
3）文部科学省初等中等教育局特別支援教育課（2018）特別支援教育資料【平成29年度】
4）文部科学省総合教育政策局教育人材政策課（2021）「令和２年度（令和元年度実施）公立学校教員採用選考試験の実施状況について」
5）鳥取県教育委員会人材開発課（2021）「鳥取県における教員の確保について」
6）文部科学省「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編」
7）鳥取県教育委員会（2021）「OJTによるとっとり人材育成の手引き」
8）米子市教育委員会（2019）米子市小学校授業力向上講座「授業映像（ストップ・モーション）から学ぶ授業スキル」研修会資料
9）鳥取県教育委員会（2019）「鳥取県公立学校の教員としての資質の向上に関する指標【教諭等】」
10）鳥取県教育委員会（2021）「第１回初任者アンケートの結果より」
11）福岡教育大学（2015）「高度な教職実践力をはぐくむデジタル基盤教材開発事業『匠のわざ』の伝承プロジェクト」
12）青山之典　兼安章子　入江誠剛　納富　恵子（2020）「動画を活用した授業分析演習とその効果」福岡教育大学大学院教職実践専攻年報第10号１－11
13）鳥取県教育センター（2021）「ICTを活用した連携事業の実施状況について」
14）鳥取県教育委員会（2019）「鳥取県公立学校エキスパート教員認定制度に関する実施要綱」
15）鳥取県教育委員会（2021）令和３年度島根大学教育学部と鳥取県教育委員会との連携協力推進協議会資料「エキスパート教員公開授業について」
16）鳥取県教育委員会（2018）「鳥取県学校教育のめざすもの」

資料

資料１　「匠のわざ」の伝承プロジェクト（一部抜粋　福岡教育大学）

資料２　ICTを活用した連携事業（鳥取県教育センター2021）

主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

みんなで創ろう！ とっとりの学び

鳥取県の子どもたちが、さらに伸びていくための

とっとりの 授業改革 【10の視点】

知的好奇心の喚起

① 魅力的な課題・教材の提示
- 自ら問いを見出し、調べてみたい、みんなで考えてみたい課題や教材を提示する
- 学習への見通しを持たせる

② 体験的な学習の充実
- これまで学んだことのつながりを意識させる
- 地域の人・もの・ことなど日常生活とのつながりを意識させる
- 具体物や視聴覚教材を使用する
- 実験や作業を取り入れる

活用する力を育てる 言語活動 と 学習評価

③ 資料の活用
- 問題解決に必要な資料を使って調べたり、考えたりする学習を設定する
- 考えの形成のために情報を精査させる

④ 思考の整理
- 調べたことやわかったことをノートに書かせる
- 問題の解き方や考え方をノートに書かせる

⑤ 説明・発表の機会の充実
- 考え方や理由を筋道立てて説明する学習活動を設定する

⑥ 学び合う活動の充実
- ねらいをはっきりさせ、新しい考えを、みんなで生み出す活動を設定する
- 考えを広げたり深めたりする活動を設定する
- 意見交換や議論の場を設定する

指導と評価の一体化

⑦ 学習評価の推進
- 一人一人の学習状況や実現状況を把握する
- 個に応じた手立てや支援を行う

次につながる 振り返り

⑧ 学習を振り返る活動の設定
- 「振り返り」の時間を設定し、達成感・成就感を味わわせる
- 次の学習の課題やポイントがつかめるよう工夫する

⑨ 家庭学習と連動した学びの定着
- 学校で学んだことが家庭での復習や予習および自主的な学習につながるような支援に努める

⑩ 落ち着いてのびのびと学べる環境づくり（学びの集団・人間関係づくり）

「主体的・対話的で深い学び」と「とっとりの授業改革【10の視点】」との関わり

本県においては、「とっとりの授業改革【１０の視点】」を授業改善の視点として位置づけることで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につながると考えています。

主体的・対話的で深い学び	「とっとりの授業改革【１０の視点】」の中で関係の深い視点
＜主体的な学び＞ 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。	❶ ❷ ❸ ❹ ❼ ❽ ❾ ❿
＜対話的な学び＞ 子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。	❸ ❺ ❻ ❿
＜深い学び＞ 各教科等で習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、問いを見いだして解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。	❶ ❷ ❸ ❹ ❺ ❻ ❽ ❾ ❿

資料３　とっとり授業改革【10の視点】（鳥取県学校教育がめざすもの）

本研究の実践は以下のとおり，各新聞社に記事として取り上げられた。

取　13版S　2021年(令和3年)2月2日(火)　朝日

島根大生 ネット参観

岩美北小で公開授業

島根大学教育学部（松江市）の学生がオンライン形式で鳥取県内の小学校の授業を参観する取り組みが1日、岩美町浦富の町立岩美北小学校であった。県出身者が比較的多く通う同学部と県教委はこれまでも交流してきたが、昨年10月にICT（情報通信技術）の利活用に関する協定を新たに結んだことから、この日の公開授業が実現した。

授業をしたのは、県教委から指導的教員の「エキスパート教員」に認定されている3年担任の米井由美教諭。算数で「36個のクッキーを同じ数ずつ三つの袋に入れると一袋は何個」という問題を出した。30人の児童が3人ずつの班に分かれ、クッキーに見立てた36個の○を描いたり、線分図を書いたりして、話し合いながら班ごとに割り算の概念を理解していった。

島根大の学内で学生らは、児童が答えを導き出す過程を映像を通して参観した。米井教諭は取材に「わかる子が答えを発表して終わりではなく、児童みんなで学びあう授業を心がけている」と話した。

授業の映像はパソコンを通して島根大学の学生のもとへ送られた＝岩美町浦富

資料４　「島大生ネット参観」（令和３年２月２日付け朝日新聞）

日本海新聞　2021年(令和3年)11月6日　土曜日　広域　(20)

ふるさとワイド

生徒との接し方学ぶ

鹿野学園をオンライン参観

教職目指す島根大生ら

教職を目指す島根大生が10月29日、同大と鳥取市鹿野町鹿野の鹿野学園をオンラインでつなぎ、優れた教育実践を行うエキスパート教員の授業を参観した。教員との意見交換もあり、生徒の主体性を引き出す接し方や授業配分などを質問した。

情報通信技術（ICT）を生かした鳥取県教委と同大教育学部による教育推進に関する協定の一環。同大1～4回生の希望者18人が、充実した人生を送るための日常的な行いについて考える同学園7年生の道徳を参観した。

同学園のエキスパート教員の前田静香教諭は、授業中に教科書は使わず、プロスポーツ選手が習慣的に行っている動作「ルーティン」を例に、生徒たちに日々の行いを質問。縄跳びや空を見るなど次々出てくる意見に「すごいな」「頭の中を空っぽにするんだね」などと共感した。同大側では、担当者が授業を聞く学生に前田教諭の狙いを解説した。

学生らは参観後、パソコン越しに生徒との接し方などを聞き、前田教諭は「『いいね』と言われると話したくなるし、私もそうだった」と自身の経験を交えたものだと説明した。

村田大和さん(21)＝境港市湊町＝は「道徳は教科書に出てくる人物について考えさせることがあるが、自分に置き換えて考えさせるところが新たな発見だった」と話した。（高垣正範）

鹿野学園のエキスパート教員の前田教諭（左）に授業の進め方などを聞く学生ら

中海圏域

資料５　「生徒との接し方学ぶ」（令和３年11月６日付け日本海新聞）